

【アーティストサポート】を通して、アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

<2023年度年間サポート>

F.A Y.A T.I 今井良成 S.U 植原由起子 S.U M.E A.O K.O S.O 河村はるみ K.K
木村美明 M.K 小室秀夫 新貝康司 N.S M.S 関根一祿 A.D 土屋涼子 トゥルーラブ真智子
トゥルーラブ真凜 N.N 中島和 中野和枝 中村尚義 中村美穂 T.H M.H 平山美由紀 藤野盾臣
細沼康子 M.H 松尾芳樹 松田香 真野美千代 三橋祐太 J.M H.M S.Y 渡部伸子
TDK株式会社 MEDIHEAL & SEKIDO コンツェルトハウス・ジャパン by 株式会社キタマ
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション
ライフプラン株式会社 Heart of the Earth株式会社
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社 株式会社RINABO きづきアセット株式会社
株式会社青林堂 日本パデレフスキ協会淡路
(匿名希望 22名)

<舘野泉バースデープロジェクト>

Y.A 阿部将任・登美子 新井京子 池田光世 一柳吉子 A.I 遠藤一秀 大嶋早苗 大嶋浩美
大谷恵美子 S.O 奥田三華 小畑裕子 木全恵美子 久保春代 M.K 黒川智恵美 黒住彰子
斉藤久子 坂井和 佐々木暁子 菅原佳世 鈴木早苗 R.T 田口雅子 田邊英利子 土谷美保子
永作稔 中村恭子 中村康江 K.H 羽生賢次 林雄嗣・鈴子 福島晶子 堀田高秀 松田純子
三上美智恵 光永育 K.M 山家七恵 S.Y K.Y 吉岡玲子 吉田和充・淳子
舘野泉ファンクラブ東京 舘野泉ファンクラブ東北 タビオラの会 日本セヴラック協会 有限会社ムジカーザ
NPO法人 Mプロジェクト スオミ・ピアノ・スクール研究会
(匿名希望 19名)

<ショパン・ピリオド楽器プロジェクト>

S.O トゥルーラブ真智子
(匿名希望 3名)

<ニュークラシックプロジェクト>

浅岡尚子 岩井陸雄 上原啓子 小田島容子 K.K 久保千聖 雲然祥子 小池美喜 篠崎啓史 I.S T.S
トゥルーラブ真智子 トゥルーラブ真凜 T.N 長谷部 宏行 秦勝重 T.H 林 路郎 細沼康子 牧野佳那
松下泰之(マティビ) S.Y
(匿名希望 14名)

2023年11月15日現在 敬称略/匿名希望の方は記載していません

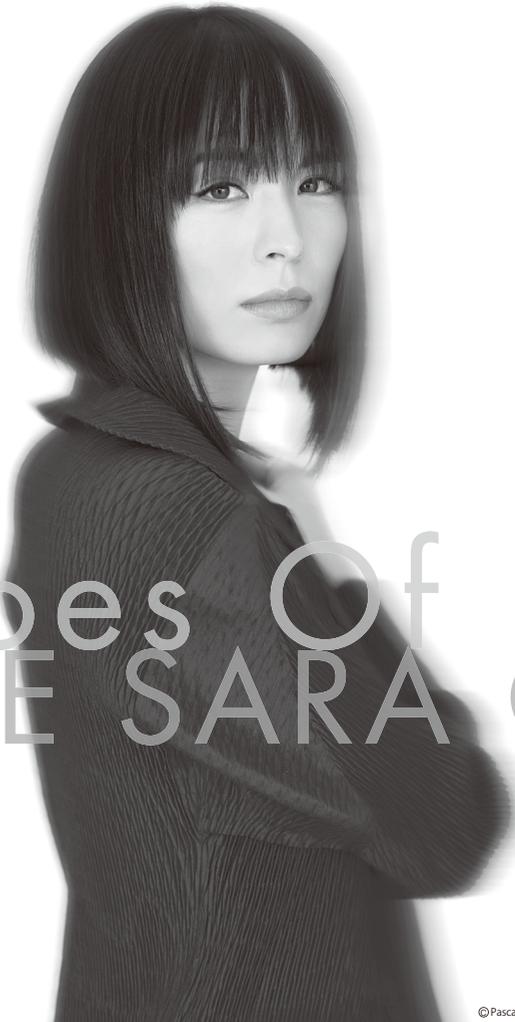


ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720

(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

アーティストサポートの
詳細はこちらを
ご覧ください。



Echoes Of Life
ALICE SARA OTT
PIANO RECITAL

©Pascal Albandopulos / DG

アリス=紗良・オット

2023年11月30日(木) 19:00開演

すみだトリフォニーホール

7:00p.m. Thursday, November 30, 2023 at Sumida Triphony Hall

主催:ジャパン・アーツ 共催:公益財団法人墨田区文化振興財団(すみだトリフォニーホール指定管理者)

後援:ドイツ連邦共和国大使館



ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ

協力:ユニバーサル ミュージック

ECHOES OF LIFE

エコーズ・オヴ・ライフ

アリス=紗良・オット (ピアノ)

Alice Sara Ott, Piano

ハカン・デミレル (建築家、デジタル・アート・インスタレーション)

Hakan Demirel, Architect /Digital Art Installation

PROGRAM

イン・ザ・ビギニング・ワズ *IN THE BEGINNING WAS*

フランチェスコ・トリストアーノ (1981-) : イン・ザ・ビギニング・ワズ

Francesco Tristano: In The Beginning Was

フレデリック・ショパン (1810-1849) : 24の前奏曲 作品28より

Frederic Chopin: Preludes Op.28

第1番 八長調	Agitato
第2番 イ短調	Lento
第3番 ト長調	Vivace
第4番 ホ短調	Largo

インファント・レベリオン *INFANT REBELLION*

ジェルジュ・リゲティ (1923-2006) : ムジカ・リチェルカータ 第1曲

György Ligeti: Musica Ricercata, I. Sostenuto

フレデリック・ショパン (1810-1849) : 24の前奏曲 作品28より

Frederic Chopin: Preludes Op.28

第5番 二長調	Allegro molto
第6番 口短調	Lento assai
第7番 イ長調	Andantino
第8番 嬰へ短調	Molto agitato
第9番 ホ長調	Largo

ウェン・ザ・グラス・ワズ・グリーナー *WHEN THE GRASS WAS GREENER*

ニーノ・ロータ (1911-1979) : ワルツ

Nino Rota: Valse

フレデリック・ショパン (1810-1849) : 24の前奏曲 作品28より

Frederic Chopin: Preludes Op.28

第10番 嬰ハ短調	Allegro molto
第11番 口長調	Vivace
第12番 嬰ト短調	Presto
第13番 嬰へ長調	Lento
第14番 変ホ短調	Allegro
第15番 変ニ長調	Sostenuto

ノー・ロードマップ・トゥ・アダルトフッド *NO ROADMAP TO ADULTHOOD*

チリー・ゴンザレス (1972-) : 前奏曲 嬰ハ長調

Chilly Gonzales: Prelude in C Sharp Major

フレデリック・ショパン (1810-1849) : 24の前奏曲 作品28より

Frederic Chopin: Preludes Op.28

第16番 変口短調	Presto con fuoco
第17番 変イ長調	Allegretto
第18番 へ短調	Allegro molto

アイデンティティ *IDENTITY*

武満 徹 (1930-1996) : リタニ 第1曲

Toru Takemitsu: Litany I. Adagio

フレデリック・ショパン (1810-1849) : 24の前奏曲 作品28より

Frederic Chopin: Preludes Op.28

第19番 変ホ長調	Vivace
第20番 八短調	Largo

ア・パス・トゥ・ウェア *A PATH TO WHERE*

アルヴォ・ペルト (1935-) : アリーナのために

Arvo Pärt: Für Alina

フレデリック・ショパン (1810-1849) : 24の前奏曲 作品28より

Frederic Chopin: Preludes Op.28

第21番 変口長調	Cantabile
第22番 ト短調	Molto agitato
第23番 へ長調	Moderato
第24番 二短調	Allegro appassionato

ララバイ・トゥ・エターニティ *LULLABY TO ETERNITY*

アリス=紗良・オット (1988-) : ララバイ・トゥ・エターニティ

(モーツァルト: 《レクイエム》“ラクリモーサ”より)

Alice Sara Ott: Lullaby To Eternity (on fragments of W.A.Mozart's "Lacrimosa")

CREDITS

Production manager for live performances: Clemens Malinowski

Production: 19:4 Architects Team

Stars (Night): Ahmet Dogu Ipek, (125cm x 360cm, Indian ink and jags on cotton paper, 2017)

Courtesy of Vehbi Koc Foundation Contemporary Art Collection, Istanbul

Dress designed by Sonia Trinkl



©Pascal Albandopulos / DG

アリス＝紗良・オット (ピアノ) Alice Sara Ott, Piano

クラシック音楽界の中で、最も独創的精神の持ち主のひとりであるアリス＝紗良・オットは、2021/22シーズンに『エコーズ・オブ・ライフ』のリリースと共に、世界ツアーを開始した。

『エコーズ・オブ・ライフ』は、ショパンの「24の前奏曲」を中心に、リゲティ、ロータ、チリー・ゴンザレス、武満徹、ペルト、トリストアーノ、そしてオット自身による7つの曲を織り込んだ彼女の足跡を辿る個人的なアルバムである。建築家デミレルとのコラボレーションは、リサイタルに随伴するデジタル・ビデオ・インスタレーションを生み出し、聴衆を仮想の旅に連れ出し、独自のコンサート体験を作り出す役割を果たす。

このプロジェクトは2021年11月にロンドンで世界初演が行われ、その後パリ、ミュンヘン、ルツェルン、ブダペスト、ルール・ピアノフェスティバル等と続き、2022年の春には日本でツアーが行われ大成功を収めた。日本ツアーの様子はNHKのドキュメンタリー番組にて彼女の生き様と共に紹介され、大きな注目を集めた。また、『エコーズ・オブ・ライフ』は、「ナイトフォール」、「ワンダーランド」、「ザ・ショパン・プロジェクト」といった発展性のあるアルバムの結果として生まれ、アルバムの総ストリーミング数は3億7000万回を超える。

2023/24シーズンは、ロンドンのサウスバンク・センターとパリのラジオ・フランスでレジデントアーティストを務め、ブライス・デスナーが彼女のために作曲した新しいピアノ協奏曲の世界初演し、ドイツ・グラモフォンから2枚の大作をリリースする。

アントニオ・パッパーノ指揮ロンドン響や、山田和樹指揮バーミンガム市響と共演。また、ニューヨーク・フィルとはカリナ・カネラキス指揮、ラヴェル：ピアノ協奏曲でデビューし、その他、ブライス・デスナー：ピアノ協奏曲をケント・ナガノ指揮チューリッヒ・トーンハレ管と初演、フィルハーモニア管、フランス放送フィル、シンシナティ響、ミュンヘン・フィル、ベルリン・ドイツ響と共演。

また、ドイツ・グラモフォンより「ベートーヴェン」と、『エコーズ・オブ・ライフ』の続編である『エコーズ・オブ・ライフ デラックス・エディション』をリリースした。

ピアニスト活動の他にも、クリエイティブな才能を発揮して世界の様々なブランドと強力な関係を築いている。ドイツの有名高級ブランド「JOST Bags」のバッグラインへのデザインを提供している他、フランスのラグジュアリーブランド「Chaumet (ショーメ)」とのコラボレーションも継続的に行っている。

ハカン・デミレル (建築家) Hakan Demirel, Architect

1983年マラティヤ生まれ。キャリアを通じて国内外のコンクールでの受賞歴があり、2011年にはヨーロッパ建築アートデザイン都市研究センターに表彰され、シカゴ・アテナイオン建築・デザイン博物館の“40アンダー40”に最も優れた建築家の一人として選出された。2014年には、世界の5人の建築家に贈られるアーキテクチャー+デザイン&セラ・アワードで、トルコの“ベスト・ヤング・アーキテクト”と同時に“黄金の新進建築家たち”の2部門を受賞。

ハカン・デミレルは2007年から2008年にかけてニューヨーク在住、帰国後、アリアフ・スワバトマズとパートナーシップを結び、スワバトマズ・デミレル・アーキテクトを設立。後に“19:4 Architects”とコード化した名のもとにイスタンブールとチューリッヒを拠点として活動している。

エコーズ・オブ・ライフ

『エコーズ・オブ・ライフ』は、私の人生に影響を与えている考えや個人的な瞬間を反映しているだけでなく、今日のクラシックの音楽家としての自分の役割や、どのように芸術的な視野を広げて行きたいかを描いた音楽と映像による旅です。

芸術的な表現ができて、他の芸術様式ともつながることができるものとその可能性に、常に魅惑されてきました。このプロジェクトで、私は、音楽と建築の世界を融合させるといふ、長年の夢を実現させました。建築家ハカン・デミレルとのコラボレーションが、『エコーズ・オブ・ライフ』に物理的な次元と視覚的な物語を与えています。ハカンとは互いの作品に大きな敬意を抱きあっていましたが、最初に出会った時、実際に、私たちの2つの芸術形式をどのようにつなぐことができるのか、想像がつかみませんでした。何度も長い時間をかけて話し合い、真剣に考えやアイディアの交換をして、ようやく共通のビジョンと夢が形を成してきました。

このプログラムでは、音楽とともに、ハカンが物語に建築的な要素を反映させるためにデザインしたデジタル・ビデオ・インスタレーションが上映されます。それは音という変化する有機体とともに存在し、息づき、『エコーズ・オブ・ライフ』の小宇宙を巡るバーチャルな旅へと誘ってくれます。

私は幼い頃から、クラシック音楽の膨大な遺産を学んで習得し、伝統的な演奏方法を守ることを最優先とする音楽教育を受けて育ちました。先生方が与えてくださった厳格な規律には色々な意味で感謝する一方で、また長年、同じ価値観を大切に過ごしてきましたが、そこには、現代の文脈に沿ってクラシック音楽を探究するという余地はほとんどなく、またそれは奨励されてもいないのだということに気づきました。

音楽は、私にとって、人間同士がシェアすることのできる、最も親密で、正直で力強い表現方法のひとつです。クラシック音楽の遺産と豊かさに対しては常にその真価を認め、情熱を注いでいますが、一定の教育や形式を守ることへの期待が、不自然な独占や排他性を生み、年代や階級によって隔てられてしまうことも見てきました。

今日のクラシックの音楽家としての私の役割と責任とは、いったい何でしょうか。私が演奏するレパートリーの大半は、何十年、何百年も前に作曲されたものです。私はオリジナル・スコアを変えこそはしませんが、今ここで、この音楽をどう解釈するか唯一無二の機会を得ているとして、楽譜を読み取ります。

私たちが現在、その音楽を高く評価している作曲家たちについて考えてみると、彼らは常に音楽そのものと、それを取り巻くすべてのものに挑戦し、再定義し、境界線を押し広げてきました。なぜ、私たちが同じことをしてはいけないのでしょうか。なぜ、過去の伝統や制約に固執し、あるいは再現するだけで、彼らの音楽と精神を受け継ぎ、先へと推し進めようとしないのでしょうか？

私たちは過去を振り返って、引き継ぐことはできても、それをそのまま再生することはできません。なぜなら、私たちの見る力、考える力、経験する力もまた、現在と結びついているからです。コミュニケーションや消費のスピードが速くなったことで、私たちは、社会的価値観や認識、需要を常に再定義する時代に生きています。その結果、常に分断と孤立の危険にさらされてもいます。音楽は、私たちの結束力を高め、社会的な意識と包容力を促しますが、それはコミュニティの中でしか存在することができません。音楽をどうとらえるか、音楽とどうつながるかということについて、自ら制限してしまってはならないのです。

19世紀まで、プレリュード(前奏曲)は、作品の本編に先立つプロローグや序奏を意味しましたが、フレデリック・ショパンは、24のキャラクター・ピースからなる《24の前奏曲》Op.28を作り上げました。それらは互いに全く異なるものでありながら、一つのまとまりのある作品を形成しています。私は《24の前奏曲》が、全てどこかでつながっている瞬間があつまったような、一連の前奏曲の上に、人生そのものを映し出しているかのように感じます。ある一步が次の一步につながり、ある時は速く、ある時は遅く、またある時は円を描くように歩み、行き止まりで引き返さなければならないこともあります。一つの章の終わりは常に次の一章のはじまりとなり、人生においては、時に予期せぬ障害物に出会ってつまずき、新たな見知らぬ道を歩いているかもしれせん。

このアルバムのために、私は7つの現代曲を選び、それらをショパンの前奏曲と組み合わせて、私のこれまでの人生を導き、形作ってきた個人的な経験や思考を表現してみました。このアイデアを最初に試みた時、これが私の感情に何をもちたらし、音楽的にどのような発見となるのか、はっきりとはつかめませんでした。初めてこのコンピレーション・アルバムを通して聴いた時に、ショパンの前奏曲がいかに現代的で、挑発的で、時代を超越したものであるかということ、これらの現代曲が証明していると理解したのです。

私たちは時代とともに変化し、困難を伴いながら社会や環境に向き合っています。考え方や記憶も、時とともに変わります。こういった感覚の変化は、過去から現在、現在から未来へ、常に私たちに伴うものです。新たな形と意味が私たち自身の中で反響し続けます。まるで私たちの生のこども——エコーズ・オヴ・ライフ——のように。

私の親愛なる友人である作曲家・ピアニストのフランチェスコ・トリスターノがこのプロジェクトのために書き下ろしてくれた《イン・ザ・ビギニング・ワズ》、アーティストのアーメッド・ドグ・イベックが提供してくれた「スターズ(夜)」、そしてファッション・デザイナーのソニア・トリンクルが私のために衣装を作ってくれたことに感謝を申し上げます。

アリス＝紗良・オット

イン・ザ・ビギニング・ワズ はじめにあったのは フランチェスコ・トリスターノ：イン・ザ・ビギニング・ワズ

まだピアノを始める以前の幼い頃、私はジグソー・パズルの、小さなピースが集まるごとに、大きな絵が見えてくるということに夢になっていました。そしていざ、ピアノを始めた時、最初に好きになった作曲家はヨハン・セバスティアン・バッハでした。私にとってバッハの音楽は、パズルを組み立てるような構造をしているように思えたのです。一つのライン、一つのメロディから始めて、他のものが加わり、様々な形、パターン、そして調性が築かれていく。

このアルバムをどのように始めたいかと考えた時、長い間一緒に音楽を作り、親友というよりも、今や家族のような存在となっているフランチェスコ・トリスターノにメールを書きました。私は、私の人生の初期の頃と響き合うような何かを探していて、バッハの前奏曲八長調にインスパイアされたショパンの最初の前奏曲につながるような線を求めているのだと。

フランチェスコは《イン・ザ・ビギニング・ワズ》という題の曲を書いてくれました。この新しい曲は、私たちの時代の精神を表していると感じます。過去を携え、現在を表し、私たちを未来へと運ぶサウンドトラックなのです。

インファント・レベリオン 幼い反乱 ジェルジュ・リゲティ：ムジカ・リチェルカータ 第1曲

私の子供時代において、自分の限界を押し広げて両親の忍耐力に挑戦することは重要な一時でした。

リゲティの《ムジカ・リチェルカータ》の第1曲は、異なるオクターヴや間のたった一つの音で構成されています。この曲から、私は、自分が“No”という言葉が発見した時のことを思い出します——たった一つの音節ですが、私に自立心とパワーを与えてくれた気がしました。限定的な言葉でありながら、無限の表現を持つ言葉です。

私の幼い頃の反抗期は、“No”を“Yes”に置き換えることを学んだ時に終わりました。そしてリゲティのこの曲は、最後の音にだけ、新しい別の音が置かれているのです。

ウェン・ザ・グラス・ワズ・グリーナー 草原がどこまでも青かった頃 ニーノ・ロータ：ワルツ

草原はどこまでも青く
日差しはどこまでも眩しく
どこまでも甘く
不思議に満ちた夜…

ピンク・フロイドの「High Hopes(運命の鐘)」は、10代の頃に大好きだった曲です。まだ私がナイーブで恐れを知らず、世の中を薔薇色の眼鏡を通して眺め、何事もロマンティックに捉えていた頃の話です。その頃、フェリーニやヴィスコンティの映画と恋に落ち、作曲家ニーノ・ロータの曲を何時間も聴いていました。最近またロータの世界を発見し、あの頃のことを思い出してノスタルジックになりましたが、実は最初に聴いた時、ロータの作品をショパンと間違えたのです。ロータのワルツのメロディや装飾音やスケールが、ショパンの前奏曲と交じり合う雰囲気…。

まるで、最初からそこにあったのではないかと思えるほどです。

ノー・ロードマップ・トゥ・アダルトフッド 道しるべのない大人への旅 チリー・ゴンザレス：前奏曲 嬰八長調

20代の初め頃、私はほとんどの時間を旅の空の下で過ごすようになり、それまで行ったことのない国や場所と出会いました。物事の見方も少しずつ変わり、踏み出す一步一步が好奇心で満たされていながらも、同時により大きな落ち込みや壁を経験するようにもなりました。失敗やそれに対する恐れというものは避けられないものであると受け入れるようになっていきます。

この時期はまた、自分が育ってきた場所や周りの人々への想いが強まる時でもありましたが、私がそれらから卒業する時を迎えているということも分かっていました。

その頃のことを振り返った時、チリー・ゴンザレスの《前奏曲 嬰八長調》が頭に浮かびました。それは、このアルバムの冒頭の音楽にエコーするだけでなく、一つの章の終止符にもなりました。同じ原点を持つものが、今は、別の形を作っています。

アイデンティティ 武満徹：リタニ 第1曲

作曲家の武満徹は、「アイデンティティが明確になる音楽の世界に身を置くことを選んだ」と述べたことがあります。私はこの言葉に共感します。音楽は、私が誰であるかを定義することができる唯一の場所だからです。

私は音楽以外にも、自分が何者であるかを捉え、定義する方法を知っていますが、それはより複雑で、はっきり言えるようになるまで30年近くかかりました。

私のアイデンティティは、国籍にあるわけではありません。父の祖国で、私の生まれた場所、今も住んでいるドイツにもありません。母の母国で、私は住んだことがない日本にもありません。私がネイティブに話すこれら2つの言語にあるわけでもないのです。それは両国の精神性や文化にどう通じてよいかわからないからということでもありません。それは、私が常にどのように見えるかでカテゴライズされ、“他者”にされ続けてきたからです。

「どこ出身ですか？」
「本当の出身地は？」

善意からの、一見害のないこの質問を、私は生まれてこのかた、何度も訊かれてきました。時には1日に何度も。その問いが自分のアイデンティティとは何かを疑わせ、葛藤を引き起こしました。自分がどこに、どのように所属しているのか、疑問を持つようになりました。訊かれるたびに、どうやら私には居場所がないのではないかと思うようになりました。

地元はどこかと聞かれれば、答えはあります。
何をやっているのかと聞かれたら、答えられます。
好きな食べ物を聞かれても、答えられます。

私は自分がどう考え、行動し、どのように人と関わるかで自分を定義しています。
それこそが、私を私たらしめているからです。

ア・パス・トゥ・ウェア 道の果ては アルヴォ・ペルト：アリーナのために

アルヴォ・ペルトの《アリーナのために》は、私の人生の中で最も傷つき、脆かった一時と結びついています。

3歳で初めてピアノの音色を聴いた時、弾いてみたいという願望が芽生えました。音楽家になりたかったのです。長い年月の間には、疑問や不安を経験したのは確かですが、音楽で生きていくことに導かれた自分の道を、問われる瞬間が来るとは思いませんでした。

2018年から、自分でも驚くような身体的な症状が現れ始め、微細運動機能に影響が出たため、演奏能力に支障をきたすのではないかと恐れを感じました。数か月にわたる診察や検査、入院を経て、ついに多発性硬化症と診断されました。

診断が下ったまさにその日、私は故郷のミュンヘンで、前作『ナイトフォール』のプログラムでリサイタルを行いました。ショパンのノクターン第48番八短調の演奏中に、しびれと痙攣を感じ

はじめ、最終的には左腕のコントロールを失いました。生まれて初めて、演奏を中断せざるを得なくなったのです。その瞬間、私が舞台の上で経験した時空の静止は、あの八短調という調性と相まって、私の心を離れることはありません。

その時から2年を経て、素晴らしい医師や自分に合った治療法と出会い、現在は無症状で過ごしています。今現在、多発性硬化症は完治する病気ではありませんが、私はこの症状による制限を受けてはいないと、自信を持って言えます。

自分自身への信頼と自信を取り戻す方法を探るのは、過酷な道程でした。自分が置かれた新しい状態を理解し、身体が発する信号に耳を傾け、読み取ることは今後も続きます。

未知の空間に一步一步足を踏み入れていく、マインドフルネスというものがあります。自分たちの内奥に深く入り込み、耳を澄ませ、意識を集中させるのです。心と体が時として求める意識に・・・。

アルヴォ・ペルトの、脆く、繊細なこの作品には、そのすべてが完璧に捉えられています。

ララバイ・トゥ・エターニティ 永遠への子守歌 アリス＝紗良・オット：ララバイ・トゥ・エターニティ (モーツァルト：《レクイエム》“ラクリモーサ”より)

ショパンの最期の前奏曲は、決定的な憤りと苦悩に終始しています。それに呼応するエピローグを見つけないと思いました。もっとオープンで無限な。

モーツァルトの“ラクリモーサ”は、彼が人生の最期に作曲して未完に終わった《レクイエム》の一部です。この音楽の中では、死すべき命は不死へと変わり、限りあるものが永遠となります。

私の編曲では、その断片を遠くにこだまさせています。それは答えのない問いのための空白に満たされているのです。

アリス＝紗良・オット
(訳：江口理恵 / 編集：ジャパン・アーツ)

【2023年 日本公演スケジュール】

11月22日(水)【大 阪】	フェスティバルホール [主催] 読売テレビ
11月25日(土)【足 利】	足利市民プラザ [主催] (公財)足利市みどりと文化・スポーツ財団 / 足利市教育委員会
11月26日(日)【郡 山】	けんしん郡山文化センター [主催] KFB福島放送
11月28日(火)【札 幌】	札幌コンサートホールKitara 大ホール [主催] オフィス・ワン
11月30日(木)【東 京】	すみだトリフォニーホール [主催] ジャパン・アーツ [共催] (公財)墨田区文化振興財団(すみだトリフォニーホール 指定管理者)
12月 1日(金)【浜 松】	アクトシティ浜松 中ホール [主催] (公財)浜松市文化振興財団